

ハイデガーにおける不安と落ち着き

ーボルノー教育学からの批判に対してー

今村 光臣

1. はじめに

本稿の目的は、不安 (Angst) と落ち着き/委ねられていること (Gelassenheit) に対する、マルティン・ハイデガー (1889-1976) と教育哲学者 O・F・ボルノー (1903-1991) の捉え方を比較し、ハイデガーの論から抹消できない実存的危機を抱えながら生きる存在論的な在り方を明らかにすることである。ボルノーは教育学的な動機から実存的危機を克服しようとし、「新しい被護性 (Neue Geborgenheit)」という概念を出す、その意図が強いあまり、ハイデガーが「総かり立て体制 (Ge-stell)」と呼ぶ、有用性の問題に陥ってしまっている。一方で、ハイデガー自身の言説において、不安と落ち着きは、存在論的に有用性を超えたものに開かれるという点では、共通性を持つものである。それゆえ、ボルノーが不安と落ち着きを対極のものと考えたのに対して、ハイデガーの思想は、避け難いものとして不安を受け入れつつ、人が存在論的な落ち着きを保ちながら生きる在り方を提示している。

教育哲学者ボルノーは、ハイデガーに強い影響を受けながらも、不安や絶望などの人生における脅威的な経験を強調する実存哲学に対して、教育学においては被護性 (Geborgenheit) に基づいた世界に対する信頼 (Vertrauen) が何よりも必要である、と説く。その点でハイデガーの不安 (Angst) の議論はボルノーに批判される。もちろん、ボルノー自身も実存哲学を「現代の真に緊急な問題である」と述べ、その哲学的意義は認めている (Bollnow 1972: 17=13)。しかし実存哲学が突きつけるそのような恐ろしい経験だけでは、人間の意義ある生活は不可能であり、「人間の外部にある実在との支持的関連を再び取り戻すこと」が求められる、とボルノーは言う (Bollnow 1972: 22-23=20)。この信頼は特定の対象を持つものではなく、個別的な信頼を可能にする世界と生一般に対する信頼を指すものである (Bollnow 1972: 19=21)。

ボルノーは実存主義の哲学的意義を踏まえて「新しい被護性」という概念を出す。これは、単なる被護性のように、実存的経験の威嚇されている状態を廃棄するものではない。そのような実存的危機を潜り抜けて、自身が世界に保護されているという、世界への信頼を取り戻した状態、その状態が、ボルノーの言う「新しい被護性」である (Bollnow 1972: 24=20-21)。そのため「ボルノーの功績は (中略) 教育にとってできるならば回避することが望ましいとさえ思われていた非連続的事象 (たとえば危機的現象) が、むしろその危機を突破することによって はじめて、人間の新しい生へ達することができる必要不可欠な契機ですらある、と指摘した点に存する」とされている (広岡 1988: 42)。ボルノーは『実存主義克服の問題』において、世界

に対する信頼の論拠の一つとして、ハイデガーの住居論を参照している。

しかし、ハイデガーの住居論から信頼についての存在論的な根拠を見出そうとした点については、ハイデガーの論を有用性の問題へと縮減してしまっている（井谷 2013: 189）、という批判もなされている。井谷によれば、ボルノーはハイデガーの住居論について「「空間一般」が保護する空間になることを理想と掲げ」（井谷 2013: 187）ている。そのため、ボルノーはハイデガーに反して「個々の実存に関わる不庇護性＝被投性の経験を全く排除してしま」ったとされる（同上）。このように、ボルノーは実存的危機を克服できないものと述べているものの、世界への信頼を取り戻すことを第一に考えるあまり、世界に対して人間を保護する役目を求めており、その点で、人間を存在との関係から捉えようとするハイデガーの思惑とは逆に、世界を、人間を守る「ため」のものとみなす、有用性の問題に陥ってしまっている。これはハイデガーが技術論の中で「総かり立て体制（Ge-stell）」と呼ぶ、あらゆる事物を使用のための物資にしてしまう問題と同様の構造を有している。

この問題に対し、本稿では、ボルノーが批判するハイデガーの思想を再検討することで、保護とは異なる実存的危機との向き合い方を明らかにすることを目指す。第2節で検討するが、ハイデガーが考える不安は死の問題とも関わっていることを考慮すれば、不安の問題は潜在的には、常に人生に付きまとう避けがたいものである。そのため、実存的危機である不安を克服するのではなく、常に実存的危機を抱えながら生きる仕方、いわば危機との共生的在り方を探ることが本稿の目的である。この問いについて、本稿では特に、ハイデガーとボルノーの不安（Angst）と落ち着き（Gelassenheit）の概念の捉え方の違いに着目する。不安と落ち着きがハイデガーの思想においては共通性を持ち、矛盾しないことを示すことによって、保護を重視するあまり有用性の問題に陥ってしまったボルノーとは異なる存在論的な実存的危機との向き合い方について示唆が得られると考えられる。

これまでもハイデガーの不安（Angst）、落ち着き（Gelassenheit）、それぞれの意義について検討した教育学の論文は多々あるが、これら2つの概念が矛盾しないことについては注目されてこなかった。例えば、不安の教育学の意義に関して言えば、ハイデガーの洞窟の比喻解釈と重ね合わせて、転向や変容の契機としての教育学の意義が指摘されている（成田 1997: 28-29）。また、落ち着き（Gelassenheit）に関して言えば、これはドイツ語では同時に「委ねられていること」を意味するため、教育における過度な計画的思考を批判することや、知ることができるものの限界を認め、新しい思考に自己を開いておくことの重要性を説く文脈で参照されている（Schwieler & Magrini 2015; Lee 2019）。しかし、不安と落ち着きはそれぞれに教育学的な意義があるだけでなく、どちらも《……のため》を求める有用性の追求を超えて、人間が存在論的に特異な存在者として、本来的な企投を行うための契機になる、という点では共通性を持つものである。

議論の流れは以下の通りである。まず、続く第2節では、ボルノーの実存主義批判は、なぜなされたのかを理解するために、前提となるハイデガーの不安概念を整理する。第3節では、ボルノーが実存主義を克服しようとした意図を確認したのち、その克服の方法の妥当性を検討する。ここでは、ボルノーの意図に反して、ハイデガーの住居論、技術論においては危険なものから人間を保護する空間の役割が述べられているのではなく、世界と其中的の事物の本性を

発揮させることこそ、人間の役割である、と考えられていることが示される。第4節では、技術批判の文脈でなされるハイデガーの落ち着き（Gelassenheit）の議論を整理し、ボルノーにおける保護されていることによる落ち着き（Gelassenheit）との相違を明らかにする。

2. ハイデガーの不安概念

ここでは『存在と時間』からハイデガー存在論の基本的な概念を整理しつつ、その存在論の中でなぜ不安という人間の感情について言及したかを明らかにする。この整理によって、ハイデガーにとっての不安とは、単なる人生における脅威的な経験という意味だけではなく、存在論的に見て人間が、本来的な企投に至る重要な契機だということが示される。

ハイデガー存在論にとって、最も根本的な問いは、存在者（存在しているモノ）と区別される存在すること、存在そのものとは何か、ということである（SZ: 4=上 31）。ハイデガーはこの問いを考えるために、現存在（Dasein）という概念を導入する。現存在とは、「われわ自身が各自それぞれであり、そして問うということを自己の存在の可能性のひとつとしてそなえている」存在者、つまり人間のことを指す。（SZ: 7=上 38-39）。ハイデガーによれば、「人間学的問題設定は、依然としてその決定的な存在論的基礎において規定されずにいる」（SZ: 49=上 129）。そのため、ハイデガーは『存在と時間』ではあえて人間という語を使わずに現存在としている。ハイデガーによれば、この現存在は常に自分の存在を通して、つまり実存という形で存在そのものに関わっている（SZ: 12=上 48）。このように、ハイデガーの実存理解はあくまでも存在の意味を明らかにする、という企図に立脚するものである。

ハイデガーによると、現存在には、世界内存在（das In-der-Welt-sein）と名付けられる特徴がある（SZ: 53=上 130）。私が存在している（ich bin）というときには、語源的に「私は住む、滞在している…」、「しかじかになじんでいるものとしての世界のもとに」（SZ: 54=上 133）という意味合いが含まれており、現存在はこの世界内存在という構成において、自己自身を世界の内部で出会ってくる存在者とその存在から理解している（SZ: 57=上 141-142）。では、世界内でなじみながら出会う存在者とは何か。

ハイデガーは自己ではない、ほかの人々との関係についても考えているが、ここでは特に不安の問題に関わる道具との関係について整理しておく。道具は、本質上、《……するためにあるもの》である（SZ: 68=上 162）。そして、《……するためにある》ということは、「なにかをあることへ向けて指示する」ということが含まれる（Ibid.）。例えば、槌には打つことへ、打つことは叩き固めることへ、叩き固めることは雨風から守ることへと向けて指示される。そして、雨風を防ぐことは、現存在の宿泊を目的とするというように続いていく（SZ: 84=上 193）。しかし、この関係はつきつめていくと、もはやいかなる指し向けも持たない《……のため》へと帰着する。この第一義的な《……のため》は結局、世界内存在として存在する現存在、つまり自己自身を指し向けているという（SZ: 86=197-198）。

現存在は、普段世界の中で道具と関わっているが、ハイデガーによると、世界自体は、このような道具がもつ指示関係が阻まれることによって、気づかれるものである（SZ: 74=上 174）。「役に立たない」ということに出会うことによって、現存在はそれまでの道具の連関や、「仕事場」全体に気づく（SZ: 74-75=上 174）。そして、その全体とともに世界が通示されてくる（Ibid.）。

ハイデガーが、現存在自身を開示する根本的な感情として不安 (Angst) に注目するのも、この世界の通示に関係している。世界内で出会う道具が親しみを持ったものであったのに対して、世界そのものは、現存在に不安 (Angst) を覚えさす (SZ: 186=上 392)。不安において重苦しく迫ってくるものは、客体的存在者ではなく、その合計でもなく、用具的存在者全般の可能性、すなわち世界そのものである、とハイデガーは述べる (SZ: 187=394)。先に確認したように、道具のような用具的存在者には《……のためにある》というように指し示すものがある。しかし、その用具的存在者全般の可能性はもはや指し示すものを持たない。そして、指し示すものがない第一義的な《……のために》は世界内存在として存在する現存在自身を指すのであった。よって、ここにおいてやっと、現存在は、世界内の他の存在者に拘うのではなく、もはや《……のために》というようには言えない無規定性のなかに、自分が身を置いていることに気づく。このように現存在は不安においてこそ孤独化され「自己自身をえらびこれを掌握する自由へむかって開かれている」 (SZ: 188=上 396) ことに直面させられる。

この不安の感情は根本的には死の問題に由来するものである。ハイデガーによれば死とは人生の終わりのことではなく「終末に臨んでいること (Sein zum Ende)」、つまり「現存在が存在するやいなやみずから引き受ける在り方」である (SZ: 245=下 50)。ひとごとでない自己の存在可能性 (seinem eigensten Seinkönnen) である死への不安においてこそ、現存在である人間は、自己忘却し世界への事柄に拘う頹落 (Verfallen) の状態から、本来の実存へと移行する (SZ: 250, 263, 266=下 60, 85, 91)。現存在は、存在するかぎりはいつも、様々な不確かな可能性に向かって自分を投げ放っているのだが、ハイデガーはこのことを企投 (Entwurf) と呼ぶ (SZ: 146=315)。『存在と時間』では、死を前にした不安によって生じる、決意性 (Entschlossenheit) に基づいた企投こそが、本来的自己に目覚めた企投とされる (SZ: 302=下 166)。

3. ボルノーによる実存主義克服の試みとハイデガーの住居論

第2節では、『存在と時間』の不安の概念を整理した。不安は、現存在が無規定性の中に生きていることを知らせ、本来的自己に目覚めた企投のきっかけとなる感情である。本節では、以上の議論を踏まえ、ボルノーがハイデガーに向けた批判と、その克服のために援用したハイデガーの住居論を検討する。そして、その結果、ボルノーの実存主義克服の試みには、ハイデガーが「総かり立て体制 (Ge-stell)」と呼ぶ有用性の問題があることが明らかになる。

1節の「はじめに」でも触れたが、改めてここでボルノーの実存主義に対する理解を整理しておく。ボルノーによれば、「実存主義は、近代の非合理主義的運動の、危機に陥った最終の段階として、もっともよく理解できる」ものである (Bollnow 1972: 19=15)。これは「十八世紀末以来、世界や生にたいする指導的原理としての理性への信頼は、急速に衰微してきた」 (Ibid.) からである。その結果、個人を超えた生の連関、生の意味が信じられなくなり、「以前には知られなかったような威嚇をもって、いまや無気味な危険なものとしての世界が、人間と対立するにいたった」のであり (Bollnow 1972: 20=16)、そして、「不安は、人間のこのようなまったく見捨てられている状態の必然的な表現となった」 (Ibid.) とボルノーは述べる。

実存哲学が不安や絶望などの感情を考察するのに対して、ボルノーは信頼 (Vertrauen) の重要性を強調する。『教育を支えるもの』においてボルノーは、信頼はすべての健全な人間的発達

と教育にとって第一の不可欠な前提である (Bollnow 1964: 18=49) と述べる。そして、このような信頼感、安心感のようなものをボルノーは「被護性 (Geborgenheit)」とも表現する。ボルノーによれば、この被護性がなければ、世界は子どもにとって脅迫的に迫ってくる恐ろしい力となり、子どもは人生への意志を失って希望もなく萎縮してしまう、という (Ibid)。ここで重要なことは、信頼が存在と生に対する一般的な信頼へと広がることである。ボルノー曰く、安心して住める世界は、当初は具体的な人物への信頼から始まる (Bollnow 1964: 18=50)。しかし、人間は不完全な存在なため、具体的な他者に対する無条件な信頼はやがて必ず崩壊せざるをえない (Bollnow 1964: 22=58-59)。そのため大人は、子どもを「もはや個々の人間に結びつくことなく、しかも起こりうるすべての幻滅の彼方で生活に恒常的な抛りどころを与える、存在と生に対する新たな一般的な信頼へと導いてゆく」必要があるという (Bollnow 1964: 22=59)。そして、たえず威嚇されながらも新たに獲得される信頼が「新しい被護性 (Neue Geborgenheit)」であると言う (Bollnow 1972: 23-25=20, 22)。

この「新しい被護性」を獲得するためには、自分が保護されていると感じられる世界の仕組みが問題となる。それゆえ、そこでは存在論的問題性が生じる、とされる (Bollnow 1972: 35=33)。ボルノーが実存主義の存在論的問題について語る際には、家の役割が重視される。世界の「圧倒的な威力にたいして、確固とした立場を獲得させる」ためには、人間の新たな居住化、〈家に住まわせること〉 (*Behausung*) が問題となる、とボルノーは述べる (Bollnow 1972: 171=196)。存在論と居住の関係については、ボルノーはハイデガーを賞賛し、彼の講演録「建てること、住むこと、考えること」(1951 年) を参照している (Bollnow 1972: 174-176=200-204)。

ハイデガーによると、建てること、住むことは語源的に存在することと関連を持つとされる。ハイデガー曰く、近代ドイツ語の「建てる (bauen)」に相当する古高ドイツ語 *buan* は「住む (wohnen)」という意味である。この場合の *wohnen* は止まる、滞在する、という意味であり (GA7: 148=65)、さらに、この「建てる (bauen)」は *ich bin* [私がいる]、*du bist* [君がいる] 等々の言い回しに出てくる *bin* に相当する、という。つまりハイデガーによれば、これらの語源的意味は「人間は、住むかぎりにおいて存在する」ということを表している、という (GA7: 149=66)。

ボルノーはハイデガーのこの論を参照し、「人間は住むことができるときにのみ、平安 [Friede] へ行き着くことができるのである」 (Bollnow 1972: 176=204) と述べる。ボルノーによれば、ハイデガーは「住むこと」と「存在すること」の関連性を述べたのち、「建てる (bauen)」と同じく「留まること」、「滞在すること」を意味するゴート語の *wunian* という語に着目している (Bollnow 1972: 176=203)。この *wunian* は「満ち足りていること」、「平和 (Friede) へと導かれ、平和のうちに留まること」を意味する (GA7: 150=69)。また、ボルノーによれば、平和 (Friede) とは「危害や威嚇から防護されていることを意味しており (中略) [ハイデガーはここで] 〈いたわられているもの〉を意味していることに注意を喚起し」としていると、される (Bollnow 1972: 176=203)。

ボルノーは以上のように解釈するのであるが、「はじめに」でも述べたように、この点はハイデガーの住居論の意義を十分に組み尽くせているとはいえない。山本 (2021) が指摘するように、ハイデガーにおいて、人間は守られているというよりも、むしろ世界のあり方を受容し、

その本質を発揮させるという仕方では世界を労っている、と考えられる（山本 2021: 23, 32）。そのことは、「ところで、住むことの根本動向は、労わることです。死すべき者たち〔人間〕は、四方界¹を労ってその本質を発揮させる、という仕方では住んでいるのです」（GA7: 152=71）、という記述に端的に表されている。

そのため、先ほど述べた平和（Friede）という語も、ハイデガーにとっては、人間が危害から守られていることを示しているのではなく、むしろ平和の語を用いて、人間の側が世界を労わっていることを述べている。ボルノーが住居について援用するハイデガーの議論は、実際は以下のよう

フリーデ（Friede）つまり平和という語は、ダス・フライエ（das Freie）つまり自由な広野、ダス・フリーエ（das Freie）という意味であり、フリー（frei）とは、損害や脅威から守られている—つまり何かに対して守られ、労わられている、という意味です。フライエン（Freien）つまり自由にするとは、本来、労わる（schonen）という意味なのです。（中略）本来的な労わることは、積極的な何かであり、それが生ずるのは、私たちが何かを前もってその本質においてそのままにしておくときです。つまり、私たちが何かをことさら匿ってその本質へ戻してやるときであり、自由にするという語に沿って言えば、囲う（einfrieden）ときなのです。住むこと、平和へと導かれることは、囲いをされて、（中略）すなわちあらゆるものを労ってその本質を発揮させる自由な広野のうちへとどまる、ということなのです（GA7: 150-151=69）。

ここで示される、世界を労る態度こそが人間の役目である、という議論は、技術批判においてもなされている。1949年にハイデガーが行った連続講演、通称「ブレーメン講演」においては、あらゆるものを物質と化す現代技術への批判が行われる。そして、そのようなあり方とは異なる、人間の本来的な存在者との関わりが同時に考察される。ハイデガーは現代技術の本質を「総かり立て体制」（Ge-stell）と表現する（GA79: 51=67）が、「総かり立て体制」においては、「現前的にあり続けるものすべてが、徴用して立てられた物質（Bestand）」と化してしまう（GA79: 26=34）。そして「徴用して立てられた物質は、利用に振り向けることのうちへとかり立てられている」（GA79: 26=35）。そしてひたすら次の利用に向けてかり立てられる連鎖は終わるところがないという（GA79: 28=38）。

ハイデガーによれば、この「総かり立て体制の本質は、物を守り（Wahr）なしに放置」してしまうことである（GA79: 46=61）。ここでハイデガーはシュヴァーベン地方の方言を例にとり、Wahrとはドイツ語本来の意味では、保護（Hut）という意味を持つと述べる。そして、守ること（Wahrnis）は言い換えれば真理（Wahrheit）のことを指す（GA79: 48=63）。守ることは、物との関わりで言えば、「物が本質的にあり続ける（wesen）領域において物の本質をいたわる（schonen）」ことである（GA79: 20=26）。そして、この守ることこそ、人間の本質だとハイデガーは述べる。「人間の偉大な本質は、それが存在の本質に帰属しており、存在の本質を真理のうちへと守るのに必要とされている点に存する」（GA79: 70=89）。

以上のようにハイデガーの住居論においては、ボルノーが考えるように、世界によって人間

が保護されているというよりも、むしろ人間の役割が世界や存在を労わることにあることが述べられている。そして、もしもボルノーのように、世界に対して人間の保護を求めるならば、それは「総かり立て体制」と同じ問題に陥ってしまうと考えられる。この違いは、ハイデガーが存在との関わりから人間を考えているのに対して、ボルノーは人生の危機や教育学的発達といった人間の現象を出発点に存在との関わりを考えている、という前提の違いに起因すると考えられる。

4. 落ち着き／委ねられていること (Gelassenheit)

先に、述べたように、ハイデガーによれば、現代技術に見られる有用性の問題（総かり立て体制）とは異なり、人間の本質は、世界を労り、存在の本質を真理のうちへと守るのに必要とされていることである（GA79: 70=89）。そして、技術批判を行なったブレーメン講演の4年前に書かれた著作『野の道での会話』においては、技術に現れる欲求の関係と異なる人間本来のあり方は Gelassenheit（落ち着き／委ねられていること）と表現される。しかし、その落ち着きは単に委ねられる受動性を意味しているのではなく、決意に基づく本来的な企投を含んでおり、その点では『存在と時間』における不安の議論と地続きであることを、ここでは示す。

『野の道での会話』の議論から保護されている状態とは異なる落ち着きを検討するために、まず欲求に関するハイデガーの言説を整理しておく。『野の道での会話』の大部分を占める「アンキバシエー」という架空の登場人物間の会話劇では冒頭、思索と近代の技術の関係が問題とされる。ここでは、ブレーメン講演と同じ技術の問題が語られる。

ハイデガーは、ここで現代技術には、すべてのものを対象化するという特徴があることを指摘する。自然は人間による前に立てる（Vorstellen＝表象）作用の対象（Gegenstand）として、つまり表象に対して用意されており、その対象化によって、「自然が人間に向けられ（zuwenden）、こうした方向づけ（Wendung）の中で利用可能（verwendbar）になる」とされる（GA77: 11=15-16）。ここで技術とは、自然を計算可能な対象に変えることで明らかにしようとする一つの思索であるが、それはあくまでも様々ある存在の開示のうちの一つの試みに過ぎないということを、ハイデガーは問題視している。

さらに、ハイデガーによれば表象と欲求には分かち難い関係がある。表象（Vorstellen）が目指していることとは、「前に（vor）置かれ（stellen）、そのような形で私たちに用意（zustellen）されること」であり、「すべての欲求（Streben＝努力、奮闘）はなんらかのものを欲求することであり、しかもその際、そこで欲求されているものは欲求に対して何らかの形ですでに与えられている」とされる（GA77: 53-54=70）。私たちは対象を欲するのだが、そのためには、対象をあらかじめ私たちの前に表象として立てておく（stellen）必要があるのだ。

このような欲求の観点から離れるため、ハイデガーは思索の本質をまず、欲しないこと（Nicht-Wollen）に求める（GA77: 51=67）。しかし、欲しないことは容易ではない。なぜならばそれは結局、何かが起こらないことを欲することであり、断念や拒否にすらも、意志（Wille）は働いているからである（GA77: 78=104）。また、ここではハイデガー自身も欲すること（Wollen）と意志（Wille）を明確に区別することができないことに困難を感じている（GA77: 78=105）。

表象に基づく欲求の関係から逃れるために、思索の本質を欲しないことに求めたものの、欲

しないことも意志の作用であるため、ここで議論は行き詰まる。この行き詰まりに対して、次にハイデガーは「意志と欲することの属している本質の領域 (Wesensbereich)」に目を向けようとする (GA77: 82=110)。この領域を考えるに際して、ハイデガーはまず地平 (Horizont) という語を導入する。ここで「地平的なものとはすべての方向に向けられている開かれた視界ないしは視線の流出をその本質とするもの」とされる (GA77: 83=112)。

この地平の議論においては、プラトンのイデアの議論と似通った例が出される。ハイデガーによれば、私たちは樹木性を予め見ていなければ、個々の木を木として見ることができない。しかし、木を木として見させる視界の全体は、私たちが作ったものではない。そのため、この視界の全体である地平は私たちの能力を超えたものである、とされる。「私たちは地平の中を見入ることによってはじめて何かを見ることができるのです」と「アンキバシエー」の登場人物である賢者は述べる (GA77: 87=117)。また「思索とは、そもそも地平、プラトンが事物のイデアと呼んだ対象の外観と本質が、そこにおいて私たちに見えるようになる視界を (私たちの) 前に置き (Vor-stelle)、用意する (Zu-stellen) ことに他なりません」 (GA77: 91=122) と登場人物の一人である学者は述べる。

しかし、ここで視界は、私たちに見えることを可能にする、前に置く (Vor-stelle) もの、と呼ばれるように、地平はまだ表象的關係である、とされる。「[地平は] 私たちの表象に対して対象として現れるものの外観への見通しによって満たされているのですが、この開かれているものの私たちの方にむけられた側面に過ぎないのです」、とされる (GA77: 112=151) ように、地平はより根本的な開かれているものの一部に過ぎないとされる。

この、地平より根本的な開かれているもののことをハイデガーは「会域 (Gegnet)」と名付ける。会域とは、「すべてをお互いに関わらせつつ、それらをそれ自体における休息の中に滞在させるべく呼び集め」るものである (GA77: 114=154)。そして、会域は表象することができないもの、とされる (GA77: 115=155)。この会域に対する人間の本来的態度としてハイデガーは、委ねられていること、待つことを挙げる。そして、その委ねられている状態こそが存在者に落ち着き (Gelassenheit) をもたらすのだとされる。

賢者 この待つこと (Warten) の本質はしかし会域へ委ねられている状態 [Gelassenheit= 落ち着き] なのです。但し、会域は他ならぬそのつど委ねられている状態をそれ自体に帰属させる、つまりそれ自体の中で休息させる (in sich beruhen läßt) ものなのです [...] (GA77: 122=167)。

しかし、この記述だけではまだ待つことの内実は明らかではないだろう。ハイデガーは待つことを、主に否定的な記述を使って表現している。それによるとまず、待つこととは期待する (erwarten) ことではない。「期待するということはすでに表象することの中に巻き込まれ、表象によって表象されたものに依存してしまっている」 (GA77: 115=156)。何かを期待するような関係は、容易に「総かり立て体制」と同じ問題に陥ってしまう。そのため、ボルノーが考えるように、危険な世界に対して避難所を建てようとする試みは、「保護をするためのもの」という形で世界や会域を開示しようとする一つの企投ではあるものの、ハイデガーの住居論、技術批

判に照らして言えば、待つことを十分に行なっているとは言い難い。

とはいえ、待つことは全くの受動性でもない。「委ねられている状態の中には世界中のどのような行為よりも、そして人類のどのような策謀よりも激しい能動性が隠されている」(GA77: 108=146)とあるように、待つことは、能動・受動の関係を越えたものである、とされる (Ibid. cf. 中 2010: 74)。先に、思索の本質が「欲しないこと」に求められていながらも、そのことが結局は「欲しないことを求めること」に陥ってしまい、表現として上手くいかなかったのはこのためである。

同時に、会域は私たちから隔絶して存在する特殊な領域を意味しているのでもない。ハイデガーによれば、会域とは人間が「本来その先へは行けないほどのはじめから」属している領域である (GA77: 146=199)。表象さえもこの会域の一つの側面ではある。その場合、会域は表象を成り立たせるもの、つまり地平として現れている。「地平は私たちの前に立てること (Vorstellen) に向けられた会域であって、その場合、会域は地平として私たちを取り巻き、そのような形で私たちに自らを示す」のである (GA77: 121=165)。

ここまでは、否定的な記述を通して、会域を待つこと、委ねられていることを整理してきた。しかし、「アンキバシエー」の終盤において、会域との関係は真理の現成 (wesen²) として語られる。ここで「アンキバシエー」における会域と真理の関係を理解するために、1930 年に行われた『真理の本質について』からハイデガーの真理についての考えを概略しておく。

ハイデガーによれば、真理のギリシャ語はアレーθεια (ἀλήθεια) である。そして、ハイデガーはこれを、非覆蔵性 (Unverborgenheit)、秘蔵性からもぎ取られたもの、と訳す (GA34: 10-11=11-12)。この講義がなされた 1930 年の段階においては、ハイデガーはプラトンのアイデアを存在と同一視している (GA34: 51=59)。そして、アイデア (ιδέα) とは「見ること」(ιδεῖν) の内で自己を与えるものである (GA34: 48=56) ためアイデアは、それ自体客観的なものではなく、見つける (Er-blicken) ことの中の中のみある、と考えられている。しかし、同様に、アイデアは単に主観的なものでもない。見られたそのものと見つけることという二つのものは、真理が生起 (Geschehen) することに、共に属するとされる (GA34: 71-72=79-80)。

先に述べたように、『野の道での会話』(1944/45 年) の段階においては、プラトンのアイデア論は地平の段階、つまりまだ表象の段階である、と考えられるに至っているが、真理に関して、真理が客観的に存在するのではなく、人間との関わりによって生起する、という考えは「アンキバシエー」においても踏襲されている。

学者 そうであるとすれば、例えば〈決意 (Entschlossenheit)〉という言葉や、(中略) 開かれているもの (Offne) に対して自己を開くこと (Sichöffnen)、といったように考えれば良いのではないのでしょうか。

賢者 私たちが考えている会域とはそうしたものです。

学者 しかも私たちが真理の本質はギリシャ人の言い方や考え方においては非覆蔵性 (Unverborgenheit) や開蔵すること (Entbergung) であることを知れば、そこから思い出されることは、会域がおそらく隠蔽されつつ現成する (wesen) もの、言ってみれば真理の現成であるということです。

科学者 そうしますと思案の本質、つまり会域へ委ねられている状態は真理の現成への決意であるということになりますね (GA77: 143-144=196)。

ここでは会域に身を委ねることが決意 (Entschlossenheit) と重ね合わせられている。そして第2節の『存在と時間』の議論を思い返せば、本来的な企投である決意は、『……のためにある』という有用性の関係を超えた死への不安の感情から生じたものであった。加えて3節、4節で見たように、住居論、技術批判では、現代技術に見られる欲求と表象の作用に対して、ハイデガーはそのようなあり方とは異なった人間のあり方を示している。そのため、1927年に出版された『存在と時間』においても1944/45年の『野の道での会話』においても、ハイデガーが有用性を超えた存在との関わりを示そうとしている点では共通している。

先行研究においても、不安は「存在それ自身の呼び求めを聴き、真っ先に反応して予示する、いわば存在現出の「倏候」とでも呼ぶべき役割を担っている」とされる (田鍋 2014: 250)。実際にハイデガーは「形而上学とは何か」(1943)の後書きにおいて「不安を受け容れる用意のあることは、そのみに依って人間の本質が的中されている最高の呼び要めを満たすために、存在の開けの内に最高度に集中されて最後まで立ち続けることへ然り〈と云うこと〉である」(GA9: 307=388)と述べている。そのため、『存在と時間』における不安 (Angst) の分析と『野の道での会話』における落ち着き (Gelassenheit) に関する議論は、感情としては対立しているものの、それは有用性を超えた存在との関わりに人間が開かれるという点では、同じ状態を指していると考えられる。

「アンキバシエ」において、この存在の開け、根本的な領域である会域に人間が帰属している様は、Gelassenheit (委ねられていること=落ち着き) や Ruhe (休息、平静) といった語との関連で語られる (GA77: 70, 114, 118, 122=93, 154, 160, 167)。第3節における技術批判と合わせて考えれば、ここでの落ち着きとは、欲求の充足ではなく、根本的な領域である会域に開かれ、真理の現成に携わるといふ人間の本質が発揮されている状態のことである。ここで注意すべきは、会域に委ねられていることは到達されるべき目標や獲得されるべき理想として考えられてはならないということである。そのように考えれば、委ねられていることはすぐに表象になってしまう。そのため、井谷によれば、ハイデガーはあえてここで明確な答えを与えず、むしろ問いの円環運動へと読者を誘い込むことに注力している (井谷 2013: 454)、という。

しかし他方でボルノーも『実存主義克服の問題』において Gelassenheit (落ち着き) という語を用いており、世界に対する受容的な態度を示している。ボルノーによれば Gelassenheit とは「自分勝手に早まった決断を無理やり持ち出そうとしたりせず、辛抱強く待つことのできる術」である (Bollnow 1972: 53-54=54)。ここでボルノーは受動性の重要性を述べ、ハイデガーの実存哲学における、決意性を批判する。ボルノーによれば、「決意性は、全体的な生を、人間によって計画された、また、そういうものとしてまったく人間の意のままになる、一つの予測できる経過にする」(Bollnow 1972: 54=55)。広岡によれば、これは、危機のもつ実存的価値を少しも否定するものではなく、ただ過度の決意性の要求、危機の強調は、むしろ実存的な硬直の原因の温床となることを指摘するものだ、とされる (広岡 1984: 114)。

ボルノーは落ち着き (Gelassenheit) の概念を深化させ、「安らいでいること (Getrost-sein)」

という概念を打ち出す (Bollnow 1972: 62=65)。落ち着きが内部世界的な威嚇の制限を意味しないのに対して、「安らいでいること」は、「威嚇の背後にはどうしても救助してくれる存在が (中略) 控えている」ことを確信していること、とされる (Bollnow 1972: 63=67)。ここでは、人間がその努力の成果を安らいで委ねることのできる「守護するもの (Bergendes)」が想定され、ここで「安らいでいること」は未来への信頼を指す (Bollnow 1972: 64=68)。そして、安らいだ気持ちは、キリスト教的概念であり、人間による努力ではなく、恩寵のようなかたちで授けられる、とされる (Bollnow 1972: 65-66=69-71)。この「安らいでいること」の根底には希望 (Hoffnung) があり (Bollnow 1972: 113-114=131)、その希望は具体的な出来事を期待するのではなく、予期されない出来事に自分を開いておく態度だとされる (Bollnow 1972: 110: 126)。

待つこと、出来事に自分を開いておく、などハイデガーの落ち着き (Gelassenheit) と似た点もあるが、両者の思想はここでも性質を異にする。まず、ボルノーは決意性を批判して待つこと、落ち着き (Gelassenheit) の必要性を説くが、ハイデガーにとって本来の企投である決意性は意のままにしようとするのではない。そのことは企投が「計画への身構えとはまったくことになったもの」 (SZ: 145=上 315) であり、人間は特定の可能性の中にいるため、たえず他の可能性を断念している (SZ: 144=上 312) と述べられていることから分かる。次に、2 節で検討したのと同様に、ボルノーにはここでも人間を守ってくれることを期待する傾向が見られ、その点でハイデガーの技術論に見られる欲求への批判を免れてはいないと考えられる。希望の概念において、「出来事が自分の方に向かって来るにまかせる」 (Bollnow 1972: 105=126) という会域を待つことと似た関係も書かれてはいるが、「希望は、未来が情け深く、保護しながら、人間を迎えてくれることを、信じている」 (Bollnow 1972: 115=133) と書かれてあるように、保護を求める傾向は依然として見受けられる。

5. おわりに

本稿では、不安 (Angst) と落ち着き (Gelassenheit) に対するハイデガーとボルノーの捉え方を比較し、ハイデガーの論において不安と落ち着きが矛盾しないことを手がかりにしつつ、保護とは異なる抹消できない実存的危機を抱えながら生きる在り方を検討してきた。

まず第 2 節における『存在と時間』における不安の議論の整理からは、避けることのできないおのれの死に対する不安の感情が、日常の《……のためにある》という有用性の次元を超えた存在のあり方に人間を開く契機となり、本来的な自己として企投をすることを可能にする、と考えられていることが分かった。第 3 節では、ボルノーが実存主義を批判する理由を整理し、そこでハイデガーの存在論を援用している箇所を再検討した。ボルノーはハイデガーの住居論を、人間が周囲の空間に保護されている、という趣旨で理解しているものの、ハイデガー自身は住居論において人間の側が世界を労わるという逆の作用を重視していることが明らかになった。また、ハイデガーは技術批判の中で、あらゆる存在者が次の使用のための物資と化すことが技術の問題であると述べていることを確認した。第 4 節では、この技術論にも関わる著作である『野の道での会話』から、欲求とは異なる人間の本来的なあり方、存在論的な落ち着き (Gelassenheit) について整理した。ハイデガーによれば、落ち着きとは、表象による欲求、有用性の次元を超えて存在の根本的領域である会域 (Gegnet) に委ねられていることである。し

かし、委ねられている状態とは真理の現成への決意であると述べられるように、落ち着きは人間の能動的な作用を含むものである。それは、真理が客観的にも主観的にも存在せず、人間の参与によって共に生じるものだと考えられているからである。そして、同時にハイデガーにとっては、真理 (Wahrheit) が守ること (Wahrnis) と関係しており、真理への人間の関わりが、世界を労るという人間の態度に求められていることが明らかになった (3 節)。

このように、ハイデガーが考える存在論的な落ち着きとは、ボルノーのように保護されていることではなく、決意性に基づく本来的な企投によって「存在の本質を真理のうちへと守る」という人間の本質が発揮されている状態である。ハイデガーの思想が存在から人間を捉えるのに対して、ボルノーは教育学的な動機から、人間を基点にして存在と世界との関係を考える。この前提の違いこそが、両者の不安 (Angst) と落ち着き (Gelassenheit) に関する捉え方の相違が生じさせている、と考えられる。確かに、ボルノーが述べるように、子どもの成長にとって、大人などの具体的な人物への信頼から生一般への信頼を形成することは非常に重要である。本稿もその点を否定するものではない。しかし、ハイデガーが述べるように、死への不安という実存的危機は避け難いものである。そして、そのような抹消し難い危機に関して言えば、ハイデガーが述べる存在論的な落ち着きは、不安などの危機を受け入れながら、危機と共に生きる在り方について有効な示唆を提示していると考えられる。本稿では、主に『存在と時間』における不安 (Angst) と『野の道での会話』における落ち着き (Gelassenheit) の概念が存在論的な意味で共通性を持つことは明らかにできたが、なぜハイデガーが後年、実存的危機である不安ではなく、落ち着きという感情に注目したのか、という動機、思想の変遷までは説明することができなかった。この点については今後の課題とさせていただきたい。

・注釈

- 1 四方界とはハイデガーが後年、世界概念の代わりに用いる用語であり、「大地 (Erde)」、「天空 (Himmel)」、「神的な者たち (die Göttlichen)」、「死すべき者たち (die Sterblichen)」で構成されるものである。
- 2 ハイデガーはここで「本質」を意味する名詞 *Wesen* を、動詞的に使用している。これは「真理の本質が変遷することによって転換されてゆくような、本質のダイナミズムを内包している」ことを表しているとされる (井谷 2013: 249)。

・凡例

※引用の際には、既存の訳に従い、等号を用いて原語と訳の対応箇所を示した (例 Bollnow 1972: 17=13)。引用文の強調は全て原文に付されたものである。引用に補足が必要な際には [] を用いた。また、多くの場合、創文社のハイデガー全集訳を参照したが、本論文では *Sein* を「有」ではなく「存在」、*Seiende* を「有るもの」ではなく「存在者」と訳した。さらに、全集において *Gelassenheit* は「委ねられていること」と統一的に訳されているが、本稿ではこの語が同時に落ち着きという意味があることにも注目し、二つの意味を併記した。

・引用文献

ハイデガーの文献

SZ: *Sein und Zeit*, Tübingen : Niemeyer, 1967. [ハイデガー『存在と時間 上・下』、細谷貞雄訳、ちくま文庫、1994 年]

GA: *Gesamtausgabe*, Frankfurt am Main : Vittorio Klostermann.

GA7: *Vorträge und Aufsätze*, 2000. [講演録「建てること、住むこと、考えること」については、ハイデガー『技術とは何だろうか』、森一郎訳、講談社学術文庫、2019 年に収められている訳を参照した。GA7 の後に＝で示した数字は、この講談社学術文庫での頁数にあたる]

GA9: *Wegmarken*, 1976. [『道標』、辻村公一ら訳、創文社、1985 年]

GA34: *Von Wesen der Wahrheit. Zu Platons Höhlengleichnis und Theätet*, 1997. [『真理の本質について』、細川亮一ら訳、創文社、1995 年]

GA77: *Feldweg-Gespräche*, 1995. [『野の道での会話』、麻生健ら訳、創文社、2001 年]

GA79: *Bremer und Freiburger Vorträge*, 1994. [『ブレーメン講演とフライブルク講演』、森一郎ら訳、創文社、2003 年]

その他

Ballnow, O., *Die Pädagogische Atmosphäre*. Heidelberg: Quelle & Mayer, 1964. [ボルノー『教育を支えるもの』、森昭・岡田渥美訳、黎明書房、1969 年]

Bollnow, O., *Neue Geborgenheit Das Problem einer Überwindung des Existentialismus*. 3. Auflage. Stuttgart: Verlag W. Kohlhammer, 1972. [ボルノー『実存主義克服の問題』、須田秀幸訳、未来社、1969 年]

Elias Schwieler & James M. Magrini, “Meditative Thought and Gelassenheit in Heidegger’s Thought of the “Turn:” Releasing Ourselves to the Original Event of Learning”, *Analysis and Metaphysics*, Vol. 14, 2015, pp. 7-37.

広岡義之「ボルノーにおける実在主義克服の一考察：新たな被護性の教育学的意義」『人文論究』（関西学院大学文学部紀要）第 34 巻 2 号、1984 年、113-129 頁。

広岡義之「ボルノーにおける〈危機〉概念の教育学的意義」『梅光女学院大学論集』、第 21 巻、1988 年、31-46 頁。

井谷信彦『存在論と宙吊りの教育学ーボルノウ教育学再考』、京都大学出版会、2013 年。

Soyong Lee, “Thinking in Nearness: Seven Steps on the Way to a Heideggerian Approach to Education”, *Journal of Philosophy of Education*, Vol. 53, No. 2, 2019, pp. 229-247.

中敬夫「「放下」の思想ーハイデッガーとシェリングー」『愛知県立芸術大学紀要』第 40 巻、2010 年、71-84 頁。

成田真一「ハイデガーの思想における“教えること”と“学ぶこと”について」『哲学会誌』（東北大学紀要）第 32 号、1997 年、19-32 頁。

田鍋良臣『始原の思索ーハイデッガーと形而上学の問題』、京都大学学術出版会、2014 年。

山本英輔「〈建てること〉と〈住むこと〉についてのハイデガーの思索」『哲学・人間学論叢』（金沢大学哲学・人間学研究會紀要）12 号、2021 年、21-33 頁。

（臨床教育学コース 博士後期課程 1 回生）

（受稿 2025 年 8 月 25 日、改稿 2025 年 11 月 16 日、受理 2025 年 12 月 18 日）

ハイデガーにおける不安と落ち着き

ーボルノー教育学からの批判に対してー

今村 光臣

本稿の目的は、不安 (Angst) と落ち着き/委ねられていること (Gelassenheit) に対する、マルティン・ハイデガー (1889-1976) と教育哲学者 O・F・ボルノー (1903-1991) の捉え方を比較し、ハイデガーの論から抹消できない実存的危機を抱えながら生きる存在論的な在り方を明らかにすることである。ボルノーは教育学的な動機から実存的危機を克服しようとするが、その意図が強いあまり、ハイデガーが批判する有用性の問題に陥ってしまっている。一方で、ハイデガー自身の言説において、不安と落ち着きは、存在論的に有用性を超えたものに開かれるという点では、共通性を持つものである。それゆえ、ボルノーが不安と落ち着きを対極のものと考えたのに対して、ハイデガーの思想は、避け難いものとして不安を受け入れつつ、人が存在論的な落ち着きを保ちながら生きる在り方を提示している。

The Ideas of *Angst* and *Gelassenheit* in Heidegger: Response to Bollnow's Educational Criticism

IMAMURA Mitsuomi

This paper compares Martin Heidegger's (1889-1976) and O. F. Bollnow's (1903-1991) approaches to Anxiety (*Angst*) and Calmness/Letting be (*Gelassenheit*), with the aim of finding an ontological way of life that acknowledges the undeniable existential crisis according to Heidegger's philosophy. Bollnow is driven by an educational motivation to overcome this crisis, but this strong intent ironically leads his concept to fall into the problem of utility that Heidegger critiques. Heidegger, in contrast, sees a commonality between anxiety and calmness in that both open existence up to what is beyond utility at an ontological level. Thus, while Bollnow viewed the two as opposed, Heidegger's philosophy offers a path to ontological calmness while simultaneously accepting anxiety as an inescapable condition of existence.

キーワード：実存主義、不安、落ち着き、マルティン・ハイデガー、O・F・ボルノー

Keywords: existentialism, anxiety, calmness/letting be, Martin Heidegger, O・F・Bollnow